

意思決定支援

本人部会

瀧戸恵美

分科会発表者5人・6事例をリレー形式で報告・議論を深めた。

【事例一】

コロナ禍におけるマスク着用の是非。マスクが出来ない利用者、我慢してルールに従っている利用者。両者の言い合いが他の利用者を巻き込み、強いては職員の曖昧な態度が浮き彫りになった事例。日頃の職員の言動や関わり方の振り返りになった。

【事例二】

本人の望んでいる生活がはっきりしているにも関わらず、障害によって翻弄され、支援する側のアドバイスも耳に入らず、ともするとプレッシャーになりかねない事例。ありのまま、本人が望んでいる生活を一緒に捜していく事が最善なのか。権利擁護の愚行権が頭をよぎった。

【事例三】

作業所内の恋愛についての報告。挨拶出来て嬉しい↓ハイタッチ↓抱きつき↓キスに発展した事例。この二人に恋愛感情はなく発展もしないが、どんな感情であれ、人前で抱きつく事やキスをする事に対して禁止というルールを決めるべきか否か。注意、見守る事はあるが、恋愛感情がないのだから、会える事が励みになって作業所に来る事が出来ている事を他の興味に変換する事が出来ないのか。作業所の決め事（ルール）とする必要はないとの意見が多かった。

【事例四】

感情表現が薄く、言語を含めたコミュニケーション手段がほぼ無いMさんに対して、手を挙げるといふ動作を意思発信のサインとして意識的にコミュニケーション場面を作った事例。コミュニケーション

ョンを取るための場面を作っていく事で表情に変化が見られただけでなく関わる職員の表情の変化も認識出来るようになった。コミュニケーション行動が増える事で、固執行動も減少し生活し易くなった。しかし、支援が上手く入った後に必ず別の行動が起こる。これをMさんの「意思」「サイン」として見逃さないこと。支援者がマネリにならないことが重要との報告に至った。

【事例五】

言語での会話が成立し、一見コミュニケーションが取れているように見えてしまう事に困りごとを抱えている事例。会話が成り立つこと、それをもって意思決定と言えるのか。表面に見える、現れている言動と本人のニーズに開きがある為、これを埋めていく作業を行う。まず、Kさん自身を知ること。そして表面に現れていない「ニーズ」を考え、Kさんがそのニーズをどう表現していく事が良いのか。障害特性に加え、家庭環境や成育歴も絡んでいる事に十分配慮しながら人に頼り、信頼できる人を作る事を意識し、現在も育て直しを継続中。

【事例六】

作業所内で、行動に問題はないが、家庭の状況変化が原因で、母親に手が出るようになり、不眠になり、夜中に頭を叩く等の行為が始まってしまった。作業所内で問題はなくても、私たちに見落としはないか検討した事例。本人の意思確認ができる場面を増やし、コミュニケーションの機会を増やすことを試みた。

日頃から意思決定の場面も多く、意見を取り入れているつもりだったが、これは本人の表面に現れている意思に対しての支援に過ぎな

いのかもしれない。Aさん本当のねがいをAさん自身が育てる。そして、私たち支援者がそれを理解するためには、本人が手ごたえを感じられる生活、仕事、仲間を私たち支援者がしっかり作っていくこと。手ごたえを積み重ねることによって、伝えたいと思えるような安心感や自信を持てるような他者や集団との関係性が大切だと言う所に至っている。

本人部会の分科会のテーマは、数年来「意思決定支援」に定着している。別のテーマも検討するが、一周回ってここに戻る。障害があるなしに関わらず、生活する上で、コミュニケーションは必須だが、私たちは、障害がある仲間たちとコミュニケーションが取れているか、と聞かれたら、自信をもって「はい」とは言えない。そもそもコミュニケーションが取りにくい、取る術が少ない彼らの意思を引き出し、決定する支援をすることなど、どれだけ時間を掛けてもできない。事例の六人が六通りの不便さを抱えていたように、障害ゆえの、生きにくさや困りごと、あるいは行動に問題がある人というレッテルを貼られ、理不尽な思いをしている人は少なくない。

障害のある仲間たちと信頼関係を築く努力を怠らず、信じてもらえる支援者になること、彼らの心に土足で入り込むような傲慢な態度や、パターンリズムに陥ってはいけない。作業所もそこに集う人も、心地の良い環境として、寄り添っている場所であり続けること。「意思決定支援」は今後も、揺らぎ、もがき、生きながら、みんな考え続ける。

就労支援部会報告

社会福祉法人みどりの樹 海野 洋一郎

「今の時代・制度におけるはたらくことの支援とは」

「私の大切にしていること、コトバにしてみました」

昨年度までに、支援者としての在り方を見つめていく中で「現場力」というキーワードを見出し、検討してきました。

今年度の部会活動はその現場力を携えた支援者たる私たちが、いよいよ「障がいのある人たちのはたらくこと」とどう向き合っていくのかということに焦点を当てて企画立案することを主眼に議論を始めました。

進めていく中では、当然のように「はたらくことを支える」という概念や捉え方が多種多様であるという事実に突き当ります。

そこで部会では、そのうえで多様な状況をカテゴライズしたり、是非を図ったりするのではなく、その概念や捉え方が形成された経緯に注目することにしました。

これは、それぞれの法人の成り立ちやこれまでの経緯、または現在目の前にいる本人たちの特性やニーズ、地域から求められている期待や役割など、様々な要因によって形成され、地道ながら着実な実践の蓄積そのものが自分たちのアイデンティティであるはずだと考えたからです。

今回の分科会では、今現在「はたらくことを支える」ことにあたって、自分自身が大切にしていることを言語化し、その「コトバ」を掘り下げる際、込められている思いだけに留めず、その思いに至る経緯、醸成の過程に着目し発表してもらいました。

また、その整理をしていく過程で自身が日ごろ抱いている迷いや葛藤にも目を向け、この発表内では解決に至らないまでも、漠然と

していた思いを明確化することもでき、これからの取り組み・実践につなげていける内容にもなりました。

往々にして理想と現実には少なからずのギャップがあり、そのジレンマを抱えながら忙しく業務に追われる日々の中では、本来そういうときこそ立ち返るところすら見失いがちです。今回の報告で、大切にしたい思いを言語化するとともに、それを大切にしたいと思った自分自身を多角的に見つめ直す機会なり、参加された皆さん自身も考えるきっかけになったのではないかと思います。

発表者① 社会福祉法人復泉会 大石影子

「私たちの職場、そして居場所」

「はたらくことの支援」を考えた時、そもそも作業所とはどんなところだったのかと振り返ることから始めました。法人の理念や時代の変化、制度の変化を振り返り、自分自身が福祉の現場に足を踏み入れた時の思いや今まで取り組んできたことなどを振り返る中で、今、私たちに何ができるのか。何を大切にしていきたいのかを考え、場となりました。

発表を通して思いをコトバにしたことで、改めて、「作業所は私たち職場であり、居場所」なのだということでした。時代の変化とともに福祉の在り方が変わり、制度の中での「矛盾」を感じることも多くあります。その矛盾の中で私たちができることは、利用者さんやご家族と話をすることはもちろん、支援者・職員同士がもつともつと話をし、考えや思い、取り組んできたことなどを互いに知り、新たな取り組みにつなげていくための「コミュニケーションをとる

事」が、大切なのではないかと感じました。

発表者② 社会福祉法人 みどりの樹 寺田志のぶ

『共にはたらく、傍らにいる』ということ

入職十六年目となる今年、法人内で最も古い事業所から開設二年目の法人内で最も新しい事業所へと異動になりました。私にとって大変大きな環境の変化でした。新しい部署で、どう「みどりの樹らしさ」を根付かせることができるのか。大事なテーマであると感じました。

このテーマに向き合うにあたり、まず「みどりの樹らしい」とはどんなことを指すのかを考えました。法人の設立の経緯、歴史、理念を整理し、私自身が入職してから今日に至るところも振り返ってみました。振り返ることを通して、大切にしたいことについて改めて気づき、そしてそう感じた経緯を整理しました。次に、新しい事業所について、どんな方が通い、どんなニーズがあるのか整理しました。

「みどりの樹らしさ」とは、作業所をルーツとするからこそのあたたかさ、柔軟さ、みんなが生き生きとしていること、だと考えました。新しい空気は大事にしつつ、根つことなる法人の成り立ちやみどりの樹らしさは共有していきたいと考えます。今までを知り、これからの創る作業を、みなさんと一緒に楽しんでいけたらと思います。

発表者③ NPO法人 地域生活応援団あくしす 堀米美紀

「A型であることに誇りとこだわりを」

私の所属するA型事業所「お好み焼き こなこな」も立ち上げから早十一年が経過しようとしています。開店当初は最低賃金が700円代、法定雇用率も1.8%だった時代でしたが、今では最賃900円台、雇用率2.3%になり、さらにA型の報酬体系も大きく

変わりました。自分たちは、A型事業所からその先の一般就労へ積極的に繋いでいく通過施設でありたいという思い、また障がいのある方の職業の選択肢を増やすため、対人の仕事を展開していく目的：様々な思いから立ち上げ、今日まで継続し続けてきました。

しかし、変化する時代と共に、A型事業所としての存在意義や求められるものが変わりつつあります。その変化にコンセプトが揺らぎ、戸惑いを感じると同時に、これまで胸を張って取り組んできたからこその戸惑いでもあるとも思っています。そういつた時代背景から、今後は新たなコンセプトとビジネスモデルを組み立て、次の展開に移行していく過渡期にさしかかっていると感じます。今学会では、その直面する事実と現状に向き合いながら自分自身の気持ちと向かうべき方向性を点検・整理することもできました。

「働き方、またその捉え方は色々あっていい。それが、障がいのある方の選択肢の一つになる」今年度の就労支援部会の活動の中で得られたその答えを元に、次のステップへの成長を楽しみながら、時代の変化に対応していきたいと思えます。

3、まとめ

「はたらくことの支援」に正解はありませんが、所属している法人の経緯や理念を丁寧に理解すること、ベースとして障がいのある方たちの権利擁護の視点で自己研鑽し続けること、そして今目の前にいる本人たちが描く「なりたい自分」を丁寧に受けとめ、支援者としてその実現のためにどうかかわるかを一生懸命考えること、これらを総合して、誰もがそれぞれに「はたらくことの支援」の正解を持ち、言語化しておくことは重要ではないかと感じています。言葉作りのうえでは、経験も踏まえた自分自身の価値観と、団体の設立経緯や理念、果たすべき使命といったものの融合が理想であると考えます。そしてこの探求と整理こそが作業所活動と自分自身をつなぎ、すべきことが明確になり、そのうえでの実践が障がいのある人たちのQOL向上の実現に結びつくのだと思えます。

支援分野別研究報告

地域生活支援

地域生活支援部会 加藤 明成

皆さんは、ラインを利用されていますか？ラインは、利用者が相互にアプリケーションをインストールしておけば、通信キャリアや端末を問わず、複数人のグループ通話を含む音声通話やチャットが可能で、それらのサービスは、通常の音声電話と異なり、パケット通信を利用するインターネット通信で、インターネットに端末が接続されていれば、無制限に通信可能です。当会も、私自身も、そんなラインの利用率は少なくありません。ラインはそもそも、韓国の実業家で「サムスン」出身の李海珍（イ・ヘジン）さんが、平成二十三年三月に発災した東日本大震災の際に、家族や大切な人と連絡を取ろうとしている被災者の映像をみて発案し、日本に滞在しながら開発を推進された、言わば人が人を想う、優しさから生まれた技術です。

それから、最近のインターネットツールとしてもう一つ、ズームです。中国系アメリカ人の実業家でエリック・ヤンさんが平成二十三年に提案して、平成二十五年にサービスが開始されました。その後企業の会議ツール等としてのニーズ等を担いながら、アップグレードを重ねていきますが、こちらの転機は言うまでもなく、平成三十一年の新型コロナウイルス感染拡大でした。オンラインの社会関係、テレワーク、遠隔教育という追い風を受け、当会も、会議に研修等、そんなズーム開催は日常になりつつあり、その世界のユーザー数は、平成三十一年の一千万人から、令和二年には二億人と増加、こちらは、パンデミックという環境からやむを得ず拡大した技術と言えます。

今年度の作業所学会は三回目、過去二回の地域生活支援部会とし

ての学会分科会のテーマは、「利用者にとってグループホームとは何か？」そして「グループホームの曖昧さの深み」でした。思えば、私自身が従事するグループホームでの取組みの根拠探しでもあったように感じています。それから、私自身の生活介護事業所への異動も経て、改めて地域生活支援を考えた時、本来の作業所（制度改正以前）やグループホーム、そして相談は、やはり万事屋業であるという思いに至りました。ならば、私が勤める熱海、伊東地域の隣、賀茂地域の金刺顧問の法人「社会福祉法人 覆育会 賀茂障害者就業・生活支援センターわ」のセンター長 高橋 和彦さんの多様な取組みを是非お聴きしたいと研究発表者をお願い致しました。

発表の内容については記録報告のページを読んでいただくとして、万事屋の実践には、知識やロジックが必要で、私のズボンの左ポケットにいつも入っている、愛するソニーのスマートフォン「エクスペリア」のように、大切な人といつでもつながってくれて、わからないことを教えてくれて、楽しみを提供してくれて、道を導いてくれる、そんな取組みであり、当事者の方にとっての存在であるべきということを勉強させていただきました。

私のポケットの中のエクスペリアには、ラインもズームもインストールされており、便利に使っています。今や文字での通信は、メールよりもラインの方が多く使います。そして、私にとって問題はズームの方です。主には仕事でパソコンに向かってということになります。おかげさまで、コロナ禍において、静岡に出張することなく、連合会の皆さんとの会議に出席させていただいております。前回、今回の作業所学会の開催もそうです。参集、対面でなくても、色々やれるということを知りました。でもですね、全部そうなるってことは駄目だと思っています。「会う」はデジタルでは伝えきれないものを伝えてくるからです。「エクスペリア」は私にとって素敵な相棒で、わからないことを「グーグル」は直ぐに教えてくれます。でも残念ながらなぜ今私が、それがわからなくて困っているのかまでを知ってはくれません。万事屋さんとはそこが違います。